

令和元年6月5日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K03227

研究課題名(和文) 革命の子供たちが親になるとき：スペインにおけるキューバ人の子育ての人類学的研究

研究課題名(英文) When Children of the Revolution become Parents: Anthropological Study of Cubans' Child-rearing in Spain

研究代表者

田沼 幸子 (TANUMA, SACHIKO)

首都大学東京・人文科学研究科・准教授

研究者番号：00437310

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：期間中、毎年1ヶ月間の継続調査を行った。スペインでは3歳になるとほとんどの子供がP3(ペ・トレス)と呼ばれる就学前教育機関に通う。カタルーニャ州ではバイリンガル教育を目玉とする私立校以外、共通語としてカタルーニャ語が使用される。このことはカスティーリャ語で育ち、育ててきたキューバ人にとって不満の種だった。しかし通学が始まると、子供たちは難なく学校と家の言葉を使い分けるようになり、この点の不満は後退する。一方、不満と不安は、本国の保育園や自宅で認められていた子供らしさが早くも抑圧されることと地域ナショナリズムとそれへの反感が存在し、寛容性が失われつつあることであった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スペインにおける、外国にルーツを持つ人々とその子供たちについては、従来、異なる言語や宗教、見た目が大きく異なり、「他者」と見なされる人々の研究が中心となってきた。これに対し本研究が扱うキューバ人はスペイン人(カタルーニャ人)との違いが顕在化せず、子供たちも言語や習慣に順応している。聞き取りに寄れば彼らの本国からの出国の主要因は、政治制度や生き方の多様性に対する非寛容性だったことが明らかになった。カタルーニャの地域ナショナリズムを危惧してきたキューバ人の不安は、長らくフランコ独裁への反省から抑制されていたものの、多様性の寛容性が低下し2019年の極右政党の台頭を予見していたと言える。

研究成果の概要(英文)：I have done field research in Barcelona for a month every year. In Spain, most children at age of 3 start to go to pre-school called P3. In Catalunya, other than private school that offers bilingual education, the language used is exclusively Catalan. It has been motive of frustration for Cubans who have been raised and having been raising their children in Castellán. However, as soon as children start to go to P3, they become fluent both in Catalan and Castellán, so their frustration lessen. On the other hand, they are uneasy about the way P3 repress the childishness and start educating language and mathematics so early. They are also anxious of heightening of regional nationalism and antipathy towards them in Catalunya, so much that tolerance towards diversity seems to be decreasing.

研究分野：人類学

キーワード：人類学 子育て 教育 ナショナリズム 革命 ネオリベラリズム 移民 ディアスポラ

1. 研究開始当初の背景

【国内・国外の研究動向及び位置づけ】

報告者はキューバ人ディアスポラに関して、ポスト・ユートピアという当事者の観点から研究を行ってきた。移民研究は長らく20世紀初頭の米国への移民をモデルとし、希望を持って移住した人々がいかにホスト国に順応するかに焦点が当てられてきた。しかし、キューバ人の出国はこのモデルに当てはまらない。従来、革命後にキューバから去る人びとは、キューバ政府側からは「革命の裏切り者」と誹られる一方、米国に逃れた人びとは自らを「亡命者」と位置づけてきた。つまりどちらもキューバからの出国を「政治的」なものとして位置づけて来た。一方、ソ連崩壊後にキューバが経済危機に陥り、出国者が増加すると、キューバ政府も、在米キューバ人も、これを経済的苦境による「経済移民」と位置づけるようになった。これら従来の議論が看過しているのは、グローバル化によって、人の移動が世界的に広がっているという世界的なコンテクストである。サッセンは、資本の移動によって多国籍企業の生産の場が拡散する一方で、中枢指令機能と金融サービスがグローバル・シティに集中し、それに伴うサービス労働の需要が増大し、周辺・半周辺諸地域から中心部へ向けた膨大な労働力移動をもたらしているという（サスキア・サッセン 2008『グローバル・シティ』筑摩書房）。本研究でとりあげるスペインは1990年代以降、経済成長によって移民送り出し国から、受け入れ国に転じた。なかでもスペイン金融経済を牽引するバルセロナは、コスモポリタンな都市としての許容力もあって、他地域よりも外国出身者の比率が大きい。

東欧と旧ソ連を中心とするポスト社会主義研究においては、社会主義政権崩壊後、生活の不確実性が増し、格差が広がり、インフォーマルで非合法的な経済活動が常態化し、社会主義へのノスタルジアや回帰が見られることが指摘されている（Jeremy Morris and Abel Polese ed. 2013『The Informal Post-Socialist Economy: Embedded Practices and Livelihoods.』Routledge）。こうしたなか、（旧）社会主義国出身者の多くがグローバル・シティをはじめとする経済の中心地に移動しているが、彼らがどのように自己の移動をとらえているか、内在的な視点からとらえたものは少ない。

【これまでの研究成果】

報告者は1999年以来、キューバでのべ2年以上に渡る現地調査を行い、ソ連崩壊後の経済危機が常態化し、社会主義の革命の理想と、それとは異なる現実の狭間で葛藤しつつ生きる人びとの姿をとらえ、民族誌としてまとめた（田沼幸子 2014『革命キューバの民族誌』）。また、本国での調査時から知る人びとを国外の移住先へ追跡調査し、彼らの移動の根底にある動機や世界観を示す映像作品にまとめた（田沼幸子 監督・編集・撮影 2010『Cuba Sentimental』60分）。

これまでの調査から、出国者にとって、出国が政治的か経済的か、という問い自体が無意味なものであることが明らかになった。経済的苦境は、政治的状況と切り離すことはできない。内面化された革命倫理に従う「革命の子どもたち」は、政府が定めた規範に従うため生活に足る収入を得られず、その矛盾を批判することもできない。状況が改善される見通しも立たないため、多くの専門職者が出国する。経済的理由のみならず、仕事/労働（trabajo）によって価値があることを実現するための出国だと言える。政府の見解に反して、出国する人々こそ、革命が育成を目指してきた、社会のために献身する「新しい人間」の理想を体現していると言える。

2. 研究の目的

本研究は、バルセロナに移住したキューバ人ディアスポラが、労働を通じた自己実現と社会への貢献という**社会主義的な希望**を持ちつつ、**資本主義社会の現実**に直面するなかで生じる葛藤と交渉のあり方を当事者の視点からとらえ、分析することを目的とする。

特に、「親になる」という**経験**に着目し、グローバルズムによって広がる格差の固定化を超え、移民や低所得者層が希望を持ち得るオルタナティブな社会の姿を探る。

3. 研究の方法

本研究は、バルセロナ在住のキューバ人の価値観と子育てのあり方を、当事者の視点に則して明らかにする試みである。グローバル・シティ論が示すように、資本の移動は周縁から中心への労働移動をもたらしたが、当事者による経験の意味づけは出身地の背景によって異なる。本研究では、スペインのグローバル・シティであるバルセロナに住むキュー

バ人たちが自らの移動をいかに語り、解釈しているのか、そしてそのなかでも特に「親になる」という経験をどう捉えているのかを明らかにする。

「革命の子供たち」として育ち、スペインに住むキューバ人たちは、職業による自己実現や、生活の自由や安心を求め、それらはある程度、実現してきた。しかし、子の誕生は、この過程に新たな局面をもたらす。本国のような家族や周囲のサポートがないなか、親となることは収入と時間の多くを供出することを意味する。子を持つことは希望と喜びである一方、負担と不安、不確定性の増大を意味し、従来は価値を置いていた他者との交流や仕事への献身から後退する傾向にある。

同時に、スペインの幼児教育においては資本主義における成功を体現しうる労働者／市民を育成するための資質——個人主義的、自己責任的、起業家的——が推進され、彼らが子供時代を過ごしたキューバ——集団主義的、政治意識の涵養、子供らしさへの寛容——とは大きく異なる環境に戸惑う声が聞かれる。こうしたなか、キューバとスペイン双方のよりよい点を取り入れて子育てをするため、各自が様々な方法を模索している。生き延びるため必要最低限の環境を整えつつも、「革命の子供たち」として次世代に伝えようとする価値を、それぞれの具体的な場面で調整し、意味付けながら保持しているかを聞き取り調査し、民族誌および人類学的映像作品としてまとめる。

4．研究成果

まず、インフォーマントであるキューバ人らと同様、社会主義／資本主義という二項対立によって捉えられていたキューバ／スペインの社会の違いが、この用語では捉えられないことが明らかになった。彼らが本国で教えられ想像していたむき出しの資本主義とは異なる形の資本主義がスペインにある。一方でそれは、医療と教育を居住者に無料で保証し、移民にも与えようとする「社会主義」の理想に近い姿をしている。他方、国籍にとらわれず誰でも自由に参加できるはずの仕事や社会生活にも、様々な資格や障壁があることがわかってきた。カタルーニャでも通じるカスティリーヤ語を話し、かつて植民地だったために言葉や感覚などに一定の共通性があるため、他の移民よりは順応の度合いが高いキューバ人は、比較的「良い」とされる職業に就くこともある。しかし、やはり地元の人よりは多くの時間と努力が必要であり、ネオリベラリズムの政策の中、流動的な労働力として雇用されることはあるものの、そこに勝ち上がるために自己投資をする分、社会的関係は希薄になり、親族もいないためセーフティーネットは脆弱である。

彼らは多大な期待を持っていたわけではないが、先行きが見えず、寛容性の低い自国へ見切りをつけて、かつて非道な支配を行ったとされる国に飛び込んだ。定住を目指していたわけではないが、多くのキューバ人が目指す米国に行こうと考えていたわけでもなかった。給与水準は生活費を賄い、数年に一度、一時帰国するのが精一杯であり、望んでいてもいなくても、スペインに当面、いることを余儀なくされている。子どもが生まれてからはなおさら、不満があっても待たないで成長する彼らを保育するのに忙しく、違う道をとろうと考える余裕も無くなっている。

その一方で、彼らはより良いとされる米国への移住を批判的にも見ている。より多くを稼ぎ、より多くを得ることが本当に幸せなことだろうか。とりわけ、銃が学校で乱射されるような事件が起きたり、学校でも社会でも英語が主要言語となり、親との会話が成り立たなくなったり、子が大学で学ぶために親が多大な犠牲を払うことが必要とされる社会を、現在の不満と引き換えに選ぶ必要はあるだろうか。そう考えると、不満を述べながらも、スペイン国籍を得た彼らは、人によっては選挙に行ったり行かなかったり、政治について語ったり語らなかつたりするものの、自分の言葉で語り、教え、子どもの進路を自身に決めさせることができる現在の場にとどまることを選択するのである。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕査読無（計 1件）

田沼幸子・林みどり「対談 ふたつの〈世界〉の狭間をノで考える：Cuba Sentimentalと『革命キューバの民族誌』をめぐる」『立教大学ラテンアメリカ研究所報』(46), 16—28, 2017

〔学会発表〕(計 7件)

田沼幸子「キューバ生活のモラリティ 暮らしのなかで見えてくること」京都イスパニア学研究会第 26 回大会、京都外国語大学スペイン語学科共催；於：キャンパスプラザ京都、12月9日、2017

田沼幸子「現代キューバにおける友情と家族 日常生活の人類学的考察」立教大学ラテンアメリカ研究所主催・公開講演会「第 48 回現代のラテンアメリカ」；於：立教大学池袋キャンパス、11月11日、2017

田沼幸子「私はこれに何も負っていない 革命キューバで生きることと去ることの重さ」グループ発表「スペインの『 Kommunismus 』 『負債論』の民族誌的検討」カルチュラルタイフーン 2017；於：早稲田大学、6月24日、2017

田沼幸子 グループ発表「スペインの『 Kommunismus 』 『負債論』の民族誌的検討」主催・冒頭発表、カルチュラルタイフーン 2017；於：早稲田大学、6月24日、2017

田沼幸子「書かなかったこと、撮らなかったこと キューバの人類学的研究について」シンポジウム「キューバ再考 あらたな展望を求めて」、日本ラテンアメリカ学会第 38 回定期大会；於：東京大学、6月4日、2017

田沼幸子「チップが変わったからバルセロナ在住 キューバ人の自己認識の語り」分科会「スペイン/カタルーニャの民族誌試論 ネオリベラリズムという視点から」主催・冒頭発表、日本文化人類学会第 51 回研究大会；於：神戸大学鶴甲第一キャンパス、5月28日、2017

田沼幸子 分科会「スペイン/カタルーニャの民族誌試論 ネオリベラリズムという視点から」主催・冒頭発表、日本文化人類学会第 51 回研究大会；於：神戸大学鶴甲第一キャンパス、5月28日、2017

〔図書〕(計 1 件)

田沼幸子、人文研叢書、『ラテンアメリカにおける国際労働移動とジェンダー・エスニシティ』松久玲子・宇佐見耕一(編)、(印刷中)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

【口頭発表】

田沼幸子「『革命の子どもたち』が親になる時 バルセロナで生きるキューバ人の戸惑い」第 19 期人文科学研究所、第 11 研究会、同志社大学、10月20日、2018

田沼幸子「キューバの友達」NUS 研究会、首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス、5月13日、2018

【エッセイ】

田沼幸子「身近なネオリベラリズムについて考える：共同研究：ネオリベラリズムの中のモラリティ」『民博通信』161：14-15、2018

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：Ibis Marlene Álvarez Valdivia

ローマ字氏名：Ibis Marlene Álvarez Valdivia

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。